

南八ヶ岳～硫黄岳撤退～赤岳～

【報告者】I藤

【日時】2017年5月5日（金）～7日（月）

【天候】5日晴れ 6日 風雨時々霧 7日晴れ

【参加者】I藤

《コースタイム》

5日 美濃戸口バス停 9:45－堰堤広場－北沢コース 11:30－赤岳鉱泉 12:45－赤岩の頭手前 14:00－赤岳鉱泉テント幕営地 15:00

6日 赤岳鉱泉幕営地 5:00－行者小屋－文三郎尾根 6:00－赤岳頂上－赤岳頂上山荘 7:10

7日 赤岳頂上山荘 4:50 出発－地藏尾根－行者小屋－赤岳鉱泉 6:30－北沢コース－堰堤広場－美濃戸口バス停 10:30

《 報 告 》

八ヶ岳は、以前から観光名所としても有名ですね。雑誌などのメディアでも初級の雪山として、何度もよく紹介されています。人工氷壁（アイスクャンディー）や赤岳鉱泉のステーキなどお楽しみも多いようです。（*GWの人工氷壁は、営業終了しています。）

入山前日は、茅野駅ホテルで宿泊し、当日は美濃戸口行きのバスに乗車しました。初めての山域に、はたして私は登らせてもらえるのか？と心配もありました。八ヶ岳山荘で入浴セットを預け、ザックの準備も整い、いよいよスタートしました。砂利道は、強い日差しが照りつけて、眩しく、すれ違う数台の乗用車からその都度、砂ぼこりが舞いあがりました。キャンプ場までは、森林浴が楽しめるかなと思っていただけに、少し消沈して歩いていました。そんなこんなでしばらく歩いていると、数メートル先で1頭の鹿とバッタリ遭遇し、驚くと同時に、自分の警戒センサーが即座に働き始めました。人間の姿を見ればすぐ逃げるだろうと、写真撮影だけさっさと済ませて、無関心を装っていました。鹿せんべいや余分なエサは持っていないからあげられない、という自分の中の暗黙のルールを伝えながら、そっと進むことにしました。しかし、この鹿は、まるで行く末を案じてくれているかのように、私の方を数分間、じっと見つめてくれていました。（あとから思うと、とても可愛らしい鹿でした。）

夏を思わせるようなピーカンの晴れの中、汗びっしょりで、ようやく赤岳鉱泉のキャンプ場に到着しました。予定より1時間遅れていたため、先に硫黄岳の登頂をすることとし、下山後にテントを設営する計画にしました。

小屋で予め手続きを済ませて、炊事場の隅で、アタックザックに荷物を詰め込み、硫黄岳山頂を目指します！（荷物のデポは、個人の責任となりますのでご注意を！）

硫黄岳に登る道のりは、徐々に傾斜も増してきて、ジグザグ道を繰り返して登っていると、下山してくる登山者とすれ違うことが多くなり、徐々に途方に暮れる気持ちとなってきました。一旦立ち止まり、携帯や計画書を取り



見届けてくれた鹿

出し、現在地は赤岩の頭手前の 2550m 付近であることを確認しました。そして、山頂に到着する時刻も大幅に遅れていることも判明し、このまま山頂を目指せば、下山後のキャンプ場の到着は、日の入り近い時刻となり、その手前の薄暗い樹林帯を歩けば、トレースを見失い遭難する危険性もあると予測しました。もうすぐ 14 時になるので、その時点で引き返そうと決意しました。（つまり、途中撤退せざるを得ない状況です。）またこのあとには、テントの設営を行うことを考えると、硫黄岳への登頂は、いつのまにか乗り気がしなくなって、心残りすることも、ほとんどありませんでした。

キャンプ場には 15 時頃に到着し、すでに 3~4 張ありました。場所選びやスペースの確保、張り綱の固定は、なかなか至難の技がいります。整地をするため、雪をすくいあげようとしたのですが、雪が固まり氷となっていて、ショベルが入りません。設営地面はやや傾斜を感じます。さらに今回のために、数十本の竹ペグを準備しましたが、それらも使用することがありませんでした。（残念！！）金属ペグに対して、雪融けの土は、泥っぽく、ふわふわ柔らかく、ペグは強力にならず、すぐ抜けてしまいました。差しては抜けるという繰り返しだったので、四つ角の張り綱のそれぞれは、切り株に引っ掛けたり、立ち木にスリングとカラビナで張ったり、大きな石も使い、様々な物を使用しながら、どうにかこうにか完了しました。完成度は 80% とまづまづといった具合でしょうか。

炊事場で食事を済ませていると、寒くなってきたので、テントに戻り、明日の天気予報のチェックをしました。赤岳鉱泉での携帯は、電波受信がなかなか入らず、もどかしい気持ちになりました。予想天気図では、翌日の夜から、前線は本州を接近している予報でした。次はラジオを用いて、聞き逃すまいとしっかりと耳を傾け、午後からは雨天という同じような予報でした。（*天気図までは書いていません。）

今さら晴天を願っても仕方のないことで、ここは開き直りつつ、明日は待機するの

か決行するのか自問自答をする時間が続き、決断に迷いながら、いつのまにか眠っておりまして。翌朝は早くに目が覚めました。今日は待機しないということ、万が一雨天の時は、山頂や稜線には小屋もあるので、積極的に利用しようと文三郎～赤岳～地藏尾根で決行することにしました。（*パーティーなら違ってきますね）アタックザックに必要な物を詰め込み、いざ出発です。昨日と同じように空は青く澄んでいました。まずは、行者小屋まで歩きます。雲の流れが早いのが気になりましたので、小屋の前も足早に進みました。阿弥陀岳と文三郎尾根を取り付きとする分岐点からは、急勾配となり、シャーベット状の雪となっていました。アイゼンの爪に力を踏み込んで進みました。徐々に岩場も見えてきて、足場の悪いはしごや鎖では、部分的にカチカチにクラストしているので、注意深く観察して歩いていました。万が一、クラストした斜面に一步でも足を置いてしまった場合、私はそのまま谷底へ落ちていくのだなあと何度も想像していました。踏み跡を見つけては、恐怖心を払拭し、登り続けました。ふと空を見上げると、青く広がっていましたが、やっぱり雲の流れは早いなあと気になりながら、中岳から赤岳山頂の分岐点に到着しました。ここからの眺めは素晴らしいのですが、カメラを取り出そうとザックを置くも、岩の表面がツルツルしていて風も強く、滑り落ちそうです。天候がよければ、この地点は撮影ポイントで、おそらく賑わう場所でしょう。



文三郎尾根～中岳分岐
阿弥陀岳

しかし、前方にも後方にも登山者は誰一人訪れませんでした。次第に風の強さを感じると同時に、上空には灰色の雲が見え始めてきました。瞬く間に、周辺はガスで覆われ、景色は真っ白に移り変わりました。一変した景色に焦燥感に駆られそうになりましたが、深呼吸を意識しながら先を急ぎました。岩のペンキマークがガスで消されませんよう、見失いませんよう、祈りながら登っていました。また、私の身体は、強風で何度かバランスを崩しそうになりました。山頂までは 30 分程のコースタイムでしたが、とても長い時間を感じました。

ようやく山頂に着き、神社の前で感謝の気持ちを合掌し、逃げ込むかのように頂上山荘の扉を開けました。目の前のストーブが、私の心も体も一気に暖めてくれました。キャンプ場にデポしている自分のテントも気になりましたが、今日は小屋で一日ゆっくりくつろぐことにしようと決意しました。

赤岳頂上



小屋の談話室の窓は、天気がよいと 360 度のパノラマビューで美しい景色が楽しめるようです。真っ白に覆われた窓ガラスの室内で、コーヒーを飲みながら一人で読書をして楽しむことにしました。しかし、その日は残念ながら日没までガスはひとときも消え去ることはありませんでした。

小屋での携帯については、受信感度が非常に良かったため、翌日の天候も欠かさずチェックが出来ました。その日の小屋は私一人だけの宿泊だったようで、ガラス窓のガタガタ風の音が、ダイレクトに伝わりました。その音は朝まで一切止むことはありませんでしたので、翌朝 3 時位に目を覚ましました。最終日となる今日の天気は、まともや好天となりました。しかし、6 時から 12 時までの瞬間最大風速は 15~20m/s でかなり強風の予報であることが、携帯からの情報で分かりました。小屋のスタッフに一言お礼を述べて、日の出とともに速やかに下山することになりました。稜線上は、耐風姿勢を取る状態までには至りませんでした。それでも身体は時々、風に流されそうになりました。

天望荘過ぎ、地藏尾根分岐でお地藏さまが出迎えてくれ、合掌しました。下りの道を確認すると、クラストしている岩は予想以上に少なかったもので、ホッと、野北の



岩場の様な斜面を下りました。2 度目のお地藏さまを過ぎ、ハイマツや樹林帯に入ると、早朝を歩いてきた稜線の状況とは、想像もつかないくらい穏やかで風もありませんでした。清々しい青空の下、赤岳鉱泉に到着し、私のテントは吹き飛ばされていなかったこと、テントの中も荒らされている形跡もなかったことで、安堵の気持ちとなりました。自炊場で、一人でラジオを聴きながら、朝食をゆっくり楽しみ、テントも撤収し、キャンプ場をあとにしました。

退屈な車道を歩いていると、見知らぬ青年と同じペースとなり、偶然にも昨日赤岳天望荘に宿泊していたということだったので、昨日の天気状況について何うと「怖かったですね～」と

開口一番に話しておられました。(同感です。ちなみに天望荘は2名だけの宿泊だったようです)

美濃戸口駅のバス停に到着し、山荘で預けていた私の入浴セットを受け取っていました。すると、スタッフの方が私に言いにくそうに、「・・・すみません、入浴室が壊れました」「・・・え？いつですか?」「・・・今朝です」という、予想外の結末を最後にむかえてしまいました。思わず思考が止まってしまい、この場でもコケそうになり、緊張の糸も切れてしまいました。これはもう笑うしかありませんね。(最後に自分も壊れました)

初めての八ヶ岳で、身を持って体験したことはたくさんあり、苦くても楽しい思い出であったといえること、運営委員や会員の皆様、家族に深く感謝したいと思います。